

「いつまでも一緒にいたい」「墓が遠くにあるので、そばで供養したい」。遺骨をペンダントやオブジェに納めて身近に置き、大切な人としての「手元供養」が静かに広がっている。亡き人を近くに感じ、語りかけることで、心の安らぎを得ている。

広がる「手元供養」

兵庫県内の男性医師(49)は、仏壇の位牌の横に高さ12センチのお地藏さんを置く。中には45歳で亡くなった妻の遺骨が入っている。今も二人で生活している、と感じる。

妻は長く難病と闘ってきた。昨年末、体調が急変し息を引き取った。通夜を終え、棺おけのそばで横になった。「離れたくない」。寂しさをどうするかもできなかった。妻がいなくなった家。帰る場所を失った、と思った。

年明け、東京に向かう途中で立ち寄った本屋で、偶然、NPO「手元供養協会」会長の山崎謙二さん(58)の著作を見つけた。新幹線の中で読み、遺骨を身近に置く供養の仕方共感した。翌日、山崎さんに連絡し、経営する「博國屋」(京都市)でお地藏さんを買った。

中のミニ骨つぼには、遺骨とともに妻の故郷、鳥取の土も少し入れた。今月、誰でも使える家の墓にも、納骨を済ませた。

仕事を終え、家に戻る。お地藏さんの前に座ると、落ち着く。「妻がそばにいます、寂しいとは思いません。自分の思うような供養の仕方が見つかってよかった」。自分が死んだ時は、お地藏さんの中の遺骨を一緒にしてもらうつもりだ。

「お父さん、一緒に来たよ」。京都府宇治市の女性(68)は今年1月、

ニュージーランドに旅行した。昨年6月に亡くなった夫の遺骨が入ったペンダントを握りしめた。夫の存在を確かに感じた。

亡き人身近に感じたい

2001年、脳梗塞で倒れた。「子どもに負担をかけるし、墓は必要ない」と、時折口にした。娘が2人いたが、ともに長男に嫁いでいた。夫は散骨や、永代供養墓などの新聞記事を切り抜き、資料を取り寄せていた。

女性は夫の希望通り、墓は作らず、自宅近くの寺に永代供養をお願いすることにした。娘とともにペンダントなどを選んだ。女性は「これに触

れると、お父さんと一緒に、と思える。これからも、いろんな所に連れていきます」と話す。夫は旅行が大好きだった。

手元供養協会は05年、関連企業7社が「新しい形の葬送文化を広げよう」と設け、全国で展覧会を開き、関連商品を販売している。山崎さんによると、購入の主な理由は、孤独感や寂しさから遺骨を手放せない場合と、「墓が遠く、お参りに行けな

い」「子どもに墓の購入、維持で負担をかけたくない」などと考えるケースという。散骨と組み合わせる人もいる。

手元供養品は遺骨をどう扱うかで、納骨型と加工型に分かれる。納骨型には、ガラス製ミニ骨つぼやハートや十字架の形をしたペンダントなどがあり、加工型には遺灰に含まれる炭素成分を利用して作るダイヤモンドなどがある。

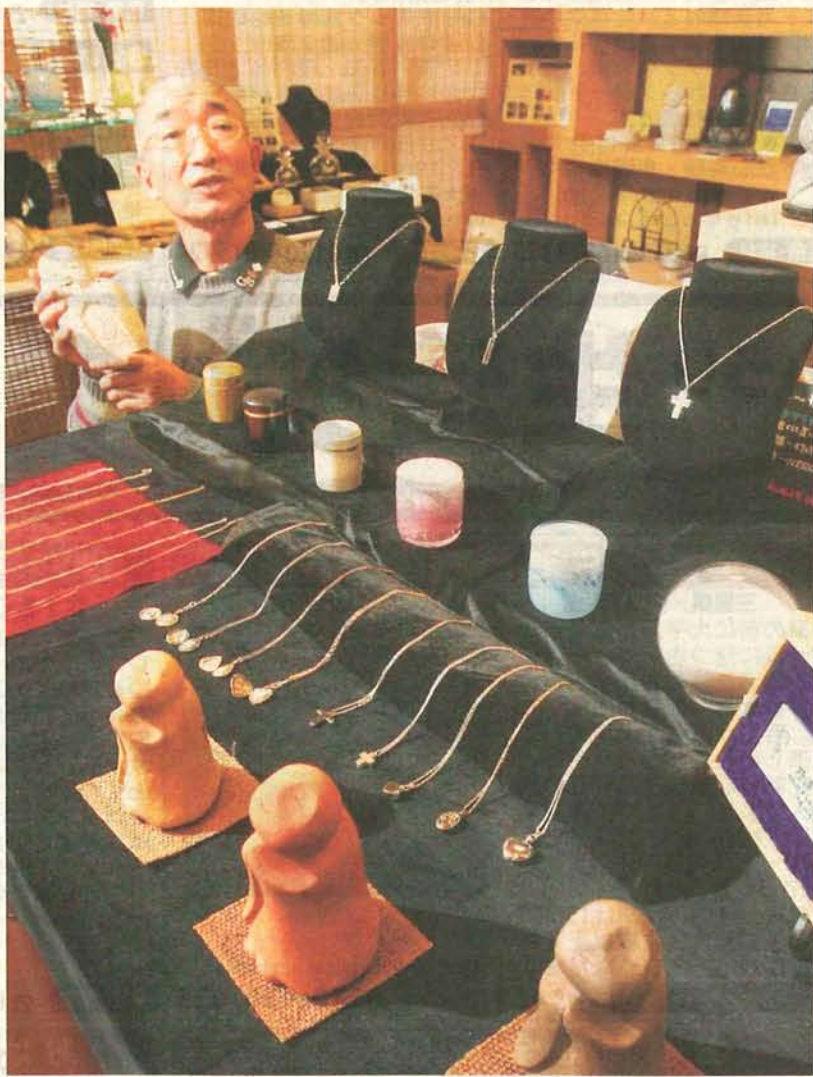
山崎さんにとって手元供養の原点は、03年に郷里、松山市で亡くなった父親への思いだ。お地藏さんは自ら発案したもので、毎朝、たばこを供える。「おやじと話をし元気をもらっている。手元供養はグリーンケア(悲しみのケア)につながる」という。

大阪府松原市には、協会の商品を中心に約150種類をそろえている手元供養専門店「方丈」がある。インターネットでの販売のほか、月に10組程度(予約制)を訪れて、熱心に供養品を選んでいく。

現代の葬送事情に詳しい第一生命経済研究所主任研究員の小谷みどりさんは「家墓と違い、手元供養は亡くなった人個人に対する愛慕心からなるもので、継承はされない。地方から都市への人口の流出や核家族化、少子化が進み、お墓や仏壇は身近なものではなくなっている。しかし、大切な人を持った時の悲しみ、手を合わせたいという自然な思いは、いつの時代にもあり、手元供養が一つの受け皿になっている」と話す。

文・古岡三枝子
写真・浜井孝幸

遺骨を納めることができるお地藏さんやペンダントなどを前に、「ゆっくりと選んでほしい」と話す店主の尾形邦明さん(大阪府松原市の方丈)



新しい葬送の形 具体的に紹介

手元供養協会会長の山崎謙二さんが最新の葬送事業をまとめた「お墓」の心配無用 手元供養のすすめ(祥伝社、税別740円)。手元供養のほかに樹木葬、散骨、永代供養墓などの新しい形の葬送について、具体的に紹介している。

葬送の変化の背景に、少子化や家制度の希薄化などがあると、無縁墓が増加していることを取り上げ、現代人が抱える葬事情の悩みを分



析。手元供養を考えるようになった経緯や思いを説明し、草花の根元に埋める樹木葬や散骨など、それぞれの方法について実施している寺院や団体の所在地、連絡先、内容、費用、選んだ人の思いなどを掲載している。

後半には「供養に関するQ&A」の章があり、「仏壇は必ずいるものですか」「遺骨を自宅に置いてもいいのですか」「分骨してもよいのですか」などの質問にわかりやすく答えている。問い合わせは、協会事務局(075・315・3370)へ。

こころのページ

